

# 隼人族の森を渡る風

創造の現場から 第44回

森の彫刻家 上床利秋

## 鑄造は単なる型取りではない

アメリカのアポロ11号が人類初の月着陸を成し遂げた時、日本のロケットはまだまだ打ち上げ失敗の繰り返しを脱したばかりだったことを記憶している。日本のロケット開発の父糸川英夫氏の焦燥感を想像すれば、自分の仕事における失敗など微々たるものである。

それにしても知っていることと、自分に身につけている実力は別なのだということ。最近思い知らされることが多々あった。

鑄込みの準備で水道管の連結に使われているような中古の青銅を溶かそうと、重量を量り坩堝に入れてコークス炉で熱していた時のことだった。見聞きして知っているはずのやり方でコークスに火をつけようとしてもなかなか着火せず、手間取って燃料と時間を無駄にした。なんとこのとだ、蓋をしなれば温度が上がりにくいばかりか、着火もしない。初の実験は鑄込みどころか思いうように炉を操作することすらできなかった。

冷えて固まった坩堝の中の青銅と取り除いたデブリと呼ばれる金属カス、それに使わなかった金属の量を合計すると、実験前の準備した重量は同じはずなのになぜか不足している。そのことを不思議に思い、ご近所に在住の鹿児島県工業技術センター勤務の吉村幸雄氏に聞いてみた。そうしたらすぐにその理由が説明された。



脱蠟した鑄型を半分土中に埋め、青銅を1250℃以上に熱して鑄込む。



手作り窯に入れて、脱蠟する。



湯口とガス抜き口を残して、すべて耐火石膏で覆いつくす。



湯口をつけて耐火石膏で覆ってゆく。



蠟原型を逆さにして、湯道をつける。

液状の金属は沸騰しなくても空気中に蒸発するのだと。確かに水も沸騰しなくても洗濯物が乾く。それと同じなのだ。金属も液状化すると大気中に浮遊しているということである。この事実を知った時の驚きは、日本の薄い美術教科書でしか知らなかった自分が外国を歩くと凄いやと思う傑作と出会う時のそれに似ていた。こういう調子で自分の思うように自在に鑄造してブロンズ像を完成させることなど、到着地点は見えていても実際はとつともなく遠い道程なのかもしれない。失敗は悔しいけれども、それによって知りえた喜びは経験した者でしか解らない。

彫刻制作活動をしていて、人はモノを目で見るが脳で認識しているというところに気が付くことがある。石膏や樹脂という素材を同じテーマで木や石で表現しても鑑賞する人の感動する深さが違う。つまり、素材の特徴を知っている人の確立している常識でモノを見ていっているのである。

「良い作品ですねえ。え、ブロンズなのですか？それはまた凄い」となるのだ。

粘土で造型した姿形を、様々な工程を経て時間をかけてブロンズ像にする仕事ははつきり言って重労働だ。経験も要るし経費もかかる。しかしながら自分には鑄込みの技術を獲得し、金属を意のままの形に操ることに成功した喜びのほうが勝っているようだ。

鑄物職人は他人の作品を鑄造する

時、依頼者作品のコピーとして完璧に仕上げなければならぬ。しかし、作家が自らの作品を鑄造するということは過程で生ずる金属ならではの表情を作品として盛り込むことが出来るのだ。その時鑄造はもはや単なる型取りではない。

日展会員 白日会会員 日本彫刻会正会員

この森のアトリエで彫刻を共に作ってみませんか

ホームページ刷新しました。

<https://douzouji.jp/>

上床利秋 検索

このページのバックナンバーもカラーで読むことができます。



## レモン画材絵画教室 **ご案内**

- 隔週水曜日 10:00～ 油絵・水彩教室
- 隔週土曜日 16:00～ 油絵・水彩 教室
- 隔週日曜日 16:00～ デッサン
- 隔週土曜日 ①10:00～ 子供絵画教室  
②13:30～
- 月1回 第2火曜 10:00～ 和紙ちぎり絵教室

お申し込みはTEL 0995-45-1015 国分進行堂・レモン画材まで